

## 中部ドニエプル訪問記

熊 野 聰

Visiting the Middle Dnipro area

Satoru Kumano

### 水の豊かさ

すでに6世紀、東ゴート人ヨルダネスは、スヴェーア人がバルト海から東地中海へ毛皮を運んだと証言している。「ヴァリヤークからギリシャ（コンスタンチノーブル）への道」の主要部はドニエプル川で、その中間点がキエフである。前回調査で北西ロシアのスターラヤ・ラドガ、ノヴゴロドを訪れ、今回キエフと終着点コンスタンチノーブル（イスタンブール）を訪ねた。休日をとっては行程の一部を歩く現代のお遍路さんのようで、本人が満足しているほどには往時を追体験できていないことは承知のうえであるが、それでも現地を訪れてようやく納得できることもある。わたくしにとって今回とくに印象的だったのは、景観のなかの水であった。

話の順序が逆になるが、キエフからの帰途、ドニエプルの最下流で黒海に合流するところを、ちょうど天気がよくて飛行機から観察できたのであるが、黒海北岸の陸地はドニエプルの川幅が広がっているだけでなく、いたるところが水であった。水に覆われているところと陸地が露出しているところは、うえからみているので印象にすぎないが、ほとんどおなじ高さ（標高）まったいらに感じられた。海と川と池（湖、あるいは一時的な水没地域？）の水が陸地を圧倒しているように、あたかも低地地帯の氾濫のようにみえたのである。8月初めであるから渇水期ではもちろんないが、これが春の増水期ならどのようなようであつたろうか。「どのようであるか」は4月の頃にまた訪ねればわかる。「どのようであつたろうか」という感慨をもったのは、史料上のある場面が思い浮かんだからである。10世紀の半ば、ビザンチン皇帝コンスタンチン・ポルフィロゲニトスが『帝国行政について』のなかで描写しているところによれば、春になってキエフに集結したルーシの舟が、大船団を組んでドニエプルを下り、黒海を渡ってコンスタンチノーブルへやってくる。乾季に平原のかなたから無数にわき出してくるような馬上の遊牧民と、風景いっぱい水に面積が膨れ上がる時期にいっせいに出現するルーシの舟は、ビザンチウムと黒海沿岸の「文明人」に、おなじように絶望的なインパクトを与えたのではな

かるうか。

10世紀のことであるからここでのルーシは、ヴァリャーグの血を引いていたとしても、すでにドニエブル中流域に土着化した第2、第3世代である（この叙述の時期は、第2世代のキエフ公イーゴリの殺害、オルガの統治とほぼ同時代）。しかし初代ヴァイキングと第2、第3世代の土着ヴァリャーグ人とのあいだに、コンスタンチノーブルを訪問する動機の点で大きな違いはなかったであろう。彼らは船団をなして帝都を訪れ、船積みしてきた毛皮などの品物をコンスタンチノーブルの絹織物や東方の奢侈的物産と交換し、あるいは隙があれば略奪し、あるいは状況次第では帝都を攻囲して引揚料（デーンゲルド）を取った。彼らにとってこれらの交易／略奪／貢租要求はおなじ意味をもち、遊牧民にとってもおなじであったろう。

「どのようであったろうか」と空想したにはもうひとつ史料がある。10世紀中頃、だいたいコンスタンチン・ポルフェロゲニトスとおなじ頃、アラブの地理学者イブン・ルスターはルーシの本拠地について、ルーシ人は「内海に浮かぶ島」に住むといている。この史料についてはむしろノヴゴロドのことをいっているのではないかと、たとえばヴェルナツキーは考えている。春の増水期にノヴゴロド一帯が水浸しになり、ノヴゴロドの古い定住地は孤立した島のようなになる。そのように書かれた研究書を読んでも、2年前の調査のときにも、とくにその点での実感は十分でなかった。今回ドニエブル河口の景色を上空からみることによって、イブン・ルスターの描写は、ノヴゴロドにも妥当するであろうが、キエフなどドニエブル沿岸のどこかであっても、おなじく妥当するだろうと思われた。つまり春の増水期には、ドニエブルにかぎらず、たいていのところで根拠地・都市は、湖中の小島ないし川中島のようにみえるということである。

この感想は自覚的には帰路の機中でえられたのであるが、あとから思えばその基礎は、キエフ滞在中に徐々に形成されてきたのである。

#### キエフの最古の定住区

都市キエフの定住史的発展については、われわれの主要なアカデミック・ガイドを勤めてくれたオレクシイ・コマル博士からと、またとくにキエフの平民居住区（行政的・支配的居住区と対比される）＝ポドル地区にかんしてはポドル考古学センター館長のサハイダク博士から、レクチャーを受けることができた。

墓地の研究によれば、最古の定住地はドニエブルに臨む3つの丘で、これらは水面に対してもっとも高い地点でもある。川から市側を眺めると、古い定住区で公の居住した支配中心地（現在の市当局やウクライナ政府の建物がある中心街、クレシチャーチク通りとウラジーミル通りという2つの大通りのある一画）はもっとも高い地点に位置し、川からは後世に立てられたウラジーミル公の像がみえる。11世紀に立てられたペチェルスキー修道院（現キエヴォ・ペ

チェルシカ大修道院)の尖塔は川からみてその左手、もっと低いところに塔がみえている。敵襲を避けるためと思われるが、古い定住中心地は平野部よりも高い地点に作られ、政治的支配の確立・安定ののち、より平野部に降りてくる、というのは通則のようである。「公的」区画は城壁に囲い込まれた。言い換えれば歴代の公が既存の囲い込まれた区域に新しい定住地を建設して付け加えるにつれて城壁は拡充された。ポドルは城外定住地であった。川からみてウラジーミル像から右手に高台がつづき、その右のはずれから急な坂になって川の水位近くまで落ち込んでいる。この斜面が平民居住区ポドルである。景観は独特であるが、機能的にはフランク地域のフォーブールや、市原さんが紹介しているシチェチンの城郭外商工業定住地と同様であろう。

サハイダク博士は、基本的には考古学によってキエフの定住地、とくに城外商工業民居住地(ポドル)の発展過程を跡づけようとしている。われわれに対するレクチャーにおいて博士は、等高線付きの平面図と立面図(ドニエプルからみて、キエフ城壁内外の発展した側の陸地断面図)に遺跡と遺物分布を示した図面を多用された。この説明も、図も非常に説得的であった。(図のコピーをいただけなかったのは残念である。その後の電子メールによるコンタクトはうまくいっていない。)ドニエプルは春の増水が激しく、キエフの城壁をともなった定住地は歴代の公によって拡大されたが、春に増水する水位より下までは発展できない。ポドルは、壁外ではあるが、平年ならば水没しない地域に発達した。しかし例年に増して水が多いときには水没の危険があった。

しかしながら博士は、遺跡と遺物の分布から、ポドルこそキエフの最古の定住地であって、軍事的政治的支配層の定住地である城壁内は、一般居住地の一定の発展を受けて成立したのではないかと、いう。岡の頂上部の墓地は、最初はポドルの住民のものだったのではないかと、いうのである。生活者にとって日常の住地は、危険ではない範囲で水際にもっとも近いことが便利だったのである。

『過ぎし歳月の物語』はドレヴリヤニン人によるキエフの公イーゴリの殺害と、イーゴリの妻オリガによる復讐を述べている(945年)。イーゴリを殺したあとドレヴリヤニン人はキエフへ来てオリガを自分たちの公マールの妃となるように求めた。このときのキエフの情景描写として、『物語』は、その当時は水がキエフの山の手の傍を流れており、したがって現在(12世紀はじめ)のポドルは水面下で、人はそこには住んでおらず、山の手に住んでいた、と述べている。そのためドレヴリヤニンの使節は「ポリチェフの下へ船で到着した」。「ポリチェフの坂」はこんにちのアンドレイ坂のてっぺんか坂の中腹と考えられている。つまりドレヴリヤニン人の使節20人はのちのポドル地区より上の地点(少なくともポドル地区の中頃より上)に船で着き、(途中経過は省くが)オリガは使節を船ごと担いで自邸に運ばせ、大きな穴の中に投げ込んで生き埋めにした。この『過ぎし歳月の物語』945年の叙述にある当時の水面は、考古学によつ

ては裏付けられず、ポドルはむしろ「山の手」よりも先に人が住んでいるというのがサハイダク博士の研究成果である。『物語』の船の話は、その年に特別の大水があって、ポドル地区が冠水していたことを年代記作者が誤って解釈したのかもしれない。

政治的中心地・支配者の居所としての核がはじめにできて、のちに平民居住区 = 商工業拠点ができたのではない、その反対である、という定住史発展の道筋は、さしあたってはキエフの考古学的実証にとどまるが、一般理論として、西スラヴ人やゲルマン系社会の都市的定住地発展のモデルを考える際にも参考になる。

キー = 渡し守伝承をめぐって

ロシア最古の年代記『過ぎし歳月の物語』は、都市キエフの語源について都市の建設者キーの名をあげている。キーを長兄とする3兄弟とひとりの妹がこの地方を支配し、キーは「ルーシ」の都市の母となるべきキエフに住んだ。このキーがキエフの語源である。つづけて年代記作者は、ある人々はキーを渡し守だったといっているが、そうならばキーがコンスタンチノーブルまで行ったはずがない、と述べている。つまり作者は自分の賛成できる意見をまず述べ、しかし無視できない別の解釈があることに留意して、それを紹介するとともに批判している。

渡し守ならコンスタンチノーブルに行ったはずがないという文章は、渡し守ならばキエフのある場所でドニエプル両岸を行き来するだけにとどまって遠距離を航行しなかったであろうという意味なのか、それとも渡し舟は小さくて、敵性諸民族の多く居住する地域を通り抜けてドニエプルを黒海まで航行するには適していない、という意味であろうか。

キエフ (Kiev) は、ヴァリヤグからギリシャへの道を通るスカンディナヴィア人にとって中継点であり、また軍事的政治的拠点でもあったと信じられている。古北欧語でキエフはケヌガルズル (Kœnugarðr) と表記されている。『過ぎし歳月の物語』ではキエフのこの北欧語表現について言及はない。後半要素 garðr は「囲い」「囲われた空間」「都市」を表わし、北ロシアのノヴゴロドはホールムガルズル、コンスタンチノーブルはツァーリガルズル (皇帝の都) とよばれる。ロシアそのものもガルザリーキ (諸都市の国) といわれる。前半要素 koenu の語尾-u は弱変化女性名詞の属格語尾であるので、辞書で探すと、kaena があり、ほかの単語はちょっと見当たらない。kaena (現代発音はキャイナ) は「ふね」を表わす。2004年の日本アイスランド学会でお会いしたシグルズル・ノルダル研究所長オルヴァル・ブラーガソン博士に質問すると、この言葉は現代でも日常語で、非常に多くのタイプの舟に用いられるとのことであった。(つまり特定の型の舟をさす術語ではなく、日本語の「ふね」にあたるのであろう。) 渡し船にも使えるかとのわたくしの質問に、もちろんとのことであった。一例として、アイスランド本島沿岸に、人は住まないが牛などの家畜を放牧する小島があり、草を食べ尽くすとまた別の島に家畜を移送するそうであるが、このときの移送のための舟はキャイナとよばれている。『過ぎ

し歳月の物語』にあるキー = 渡し守伝承の話をした。この有名な1節はもちろんよく知っているが、キエフ = ケヌガルズルの前半要素ケヌを古北欧語 = アイスランド語のキャイナと結び付けて考えたことはなかった。それはありうる推定だ、とのことであった。

キーという名の人物が実在し、渡し守だった、ということは歴史学の問題にはならない。そうではないが、ドニエプル中流に位置して、デスナ川からドニエプルへの合流点にも近いこの地が都市あるいは人口の集中地として発展する最初期の契機のひとつは、この地点でドニエプル両岸やデスナ川流域などとの交通を支配した勢力の存在にあったと考えてみる必要がある、ということである。

キエフをヴァイキングが拠点の一つとしたこと、キエフを北欧語でケヌガルズルといったこと、これらふたつは東方へ進んだヴァイキングについて述べている北欧と欧米の文献に、かならずといってよいほど言及されるが、ケヌガルズルの語源やキャイナ = 舟との関連に触れたものは見当たらない。今回のキエフ訪問においてこの問題を提起することは、わたくしが事前に心積もりしていたことの一つである。(おなじような問題はノヴゴロドの北欧語形ホルムガルズルについてもあって、現地調査報告書の3号に紹介した。)

ウクライナの都市成立期にかんする考古学研究の概観を講義し、シュエストヴィツァ遺跡の現地を案内してくれたオレクシイ・コマル博士は、文字史料についても詳しく、わたくしの質問に即座に答えてくれた。以下は彼の考え方であるが、それはウクライナ学会の定説かという質問に対して、まったく彼の私見で、誰もこれを刊行物で主張はしていないとのことである。

『過ぎし歳月の物語』におけるキー = 渡し守説は、年代記作者が伝え聞いた古い伝承ではなくて、むしろキエフに北欧人の影響が強かったときにあたらしくできた解釈であろう。キエフ住民をさす最古の形は「キヤーネ」Kyjane と思われ、「キーの人々」という意味である(この部分はトルバチョフの研究による)。北欧人はこれをキャイナ = 舟の意味に聞き、そこからキーの人々を渡し守、あるいは輸送に携わるひとびとと理解して話を作り上げたのであろう。「キーの人々」のキーはおそらくは人名ではなく、偶像のことである。それはおそらく高木、もしくは木で作った偶像であり、これを崇拝する集団がキヤーネであったと思われる。

木製偶像もしくは樹木信仰はすでに第1回調査のときに、西スラヴ人の土着信仰として見聞きしていたもので、スラヴ人であるルーシがおなじ信仰をもっているにも驚くには当たらないし、また類似信仰は人類学的にみてより広く観察されるであろう。わたくしは、北欧の主神オージンが神話上しばしば渡し守として現れることをも、ケヌガルズル/キャイナ説に結びつきうると予想していた。コマル博士の説明によって、キーという伝説上の人名そのものが「渡し守」 = 交通/流通の担い手の意味をもっていたのではないかと、とのわたくしの意見は退けられることになった。(もっとも「キー」が木の偶像もしくは高木崇拝の対象ということになると、オージンはみずから木に吊るされた神であるという神話上の連想を禁じえないが、ここで

はこれ以上触れない。) ただしかし、ヴァイキングがやってきた9世紀に、キエフの先住民が近隣地域を結ぶ交通と流通を担っていたからこそ、あるいは少なくとも、この地が河川交通の拠点であったからこそ、ヴァイキングがキエフを舟 = キャイナの要素を含む北欧語地名でよんだという可能性は残る。この可能性に意味があるのは、キエフが交通と流通の中心地だったのはヴァイキングの到来によってか、それともその以前からか、という問題と関連したときであるが、その解決は神話と伝承の解釈によってではなく、もっぱら考古学研究によってなされるであろう。

### デスナ川とシェストヴィツァ

デスナ川はキエフでドニエブルに北東から合流する。ドニエブル左岸地帯は全体として平坦で、増水期の冠水地域は大きい。キエフから北北東、約 140 キロメートル、キエフに向かって流れるデスナ川の右岸にチェルニゴフ (ウクライナ名「チェルニヒヴ」) がある。キエフ・ルーシ時代、中世ロシア時代を通じて、狭義のキエフに隣接する公国の首都であった。デスナはいまも春の増水期 (4月) に氾濫を繰り返す、最近では 1970 年に大きな被害を出したとのことである。しかしこれが土地の肥沃さを生み出してきた。

都市チェルニゴフとその近郷の墓地遺跡シェストヴィツァを見学することができた。この地はデスナ川に沿い、この川は上流でオカ川方面、さらにヴォルガ上流地域との繋がりがある。発掘責任者であるコワレンコ博士やオレクシイ博士の説明では、ヴァイキング時代のこの地の意義は、ドニエブル沿いのキエフにも繋がり、ヴォルガ上流にも繋がる点にあった。

ヴァリャ - グからギリシャへの道はドニエブル水系であるが、北欧のヴァイキングがビザンチン帝国およびオリエントと接触するルートとしては、ヴォルガ水系の方が早く開発された (ロシアの河川路のうち、9世紀のアラビア貨幣はまずヴォルガ流域に出土する)。911年のルーシとビザンチンの通商条約については『過ぎし歳月の物語』にも言及があり、ビザンチン側の資料にもあるが、これより以前に、ヴァイキング (「ロース」人や、「カガン」とよばれる王) とコンスタンチノーブルのあいだに関係があったと史料上 (たとえば『聖ベルティニア二年代記』) いわれているのは、ヴォルガからきたヴァイキングもしくはその子孫であったかもしれない。

デスナ川はこの方面とキエフをつなぐルートでもあり、あるいはキエフを離れて一時的に滞留することのできる場所でもある。オレクシイ氏の説明によれば、北欧的な特徴をもつ鉄製品や青銅製装飾品などの遺物は、北欧原産のものよりも、北欧のモデルが現地で発達したと思われるもののほうが多い。これらの製作者は、北欧モデルを真似たスラヴ人などの先住民ではなく、定住して2代目3代目の北欧人子孫ではないか。

わたくしはなぜヴァイキングがヴォルガ水系とドニエブルのあいだに留まって現地化したの

か、なかなか腑に落ちないでいる。しかしキエフというとドニエプルしか浮かばず、またドニエプルといえば黒海経由でコンスタンチノーブルへ行くルートと思い込んでいたのであるが、ドニエプルからカスピ海/バグダッドへの経路であるヴォルガへ抜けられるということがわかった。チェルニゴフ周辺には9、10世紀の戦士の特徴に富んだ墳墓がいくつか出土しているが、それらの評価についてはいまのところ保留せざるをえない。

後日キエフ市内のベッサラプスキー市場を訪ねた。それまで体験がなかったが、バザールとはこんな雰囲気かなと思われた。(この感想はのちにイスタンブールのバザールを訪ねて確認された。) 値引き交渉で金額的に大成功だったとはいえないが、バーゲニングという行為自体は社交という人間関係にほかならず、はじめてのわくわくする体験であった。今村氏を仲介にナッツやドライフルーツを買ったが、売り手はサマルカンドから来たといっていた。ウズベキスタンといわれても、旧ソ連を構成していたウクライナの隣国であるとの認識にすぎなかったであろうが、サマルカンドといわれると「ヴァリャグからギリシャへの道」という縦断路とシルク・ロードとが交差している現実に突然接触したわけで、誇張でなく戦慄の思いであった。たまたま自分の好きなナッツとドライフルーツを購入したのだが、小麦栽培と牧畜に並ぶオリエンタ的な農業生産と日常生活の一部にかかわったのだ。「・・・の道」などと呼ばれているものは1本きりの道路ではなく、無数の道が折り重なりながら広い幅をもった移動経路帯の総称なのであろう。

#### コンスタンチノーブル/イスタンブール

日本からキエフへは直行便がなく、中東欧各地からの乗り継ぎがあるが、比較的便利そうなのがモスクワ経由とイスタンブール経由であった。テロを含む治安上の危険はおなじ程度かと推測されたが、そのなかでイスタンブール経由を選んだのは、できればわれわれと研究関心の重なるトルコの研究者と会いたいからであった。事前にインターネットで調べた限りでは、9~11世紀のビザンチン史ないしコンスタンチノーブル史の研究者で、ルーシやヴァイキングとの関係を研究している学者はいない。当然予想されるように、オスマン帝国の研究が圧倒的に主流で、わずかに古典期がある。ひとり、オスマン初期およびローマ期ビザンチン帝国の経済史の専門家がいた。わたくしはこの個人、所属大学の図書館、所属研究室の事務所の3箇所に、9~11世紀コンスタンチノーブルの、対スラヴ人およびヴァイキング関係について研究している人はいないか(院生レベルを含め) また貴国における研究状況を知りたいので8月上旬に訪ねてよいか、と問い合わせた。出発の前日まで待たがついになしのつづてであった。この結果はもちろん研究状況の調査になっている。

このためイスタンブール滞在の3日間は、歴史家的な関心を離れることはなかったにしても、観光旅行のようになった。9~11世紀にかかわる遺跡は少なかったが、トロイ、ヒッタ

ト、ギリシャ時代を中心とする考古学博物館や、オスマン時代の高官邸に設置されている工芸博物館はすばらしかった。宿は中級ホテルであったがいわゆるブルーモスクと聖ソフィア寺院に近かった。日没後の散歩にはブルーモスクを訪ね、礼拝にあたりと遠慮してモスクを離れたが、あるときモスクに向かって歩み入ろうとしていた老聖職者に出会った。軽く頭を下げて目礼すると、やさしい声をかけてくれた。(神のご加護を)といわれたのだと思う。